

# 生活文化史 *Seikatsu Bunkashi*

<史料館だより>

## 目 次

◇展示品との対話（十一）

レジスター ..... 水口千里 2

◇トライやる・ウィークと史料館 ..... 道谷 卓 3

◇史料館日誌抄・資料寄贈者ご芳名 ..... 4

2002.5.1  
NO.29

トライやるウィークと史料館  
史跡調査をする本庄中学校の生徒  
(P. 3 参照) ▶



神戸深江生活文化史料館

## 展示品との対話（十二）

## レジスター

史料館研究員 水口千里

このレジスター、見学に訪れるこどもたちのお気に入りの資料である。バーコードを読み取る最新の機械ではなく、旧式のタイブライターのような数字キイのついたレトロな雰囲気のレジスターである。金額表示窓がたった四桁、つまり最高金額が九十九九円までしかなく、今の物価と大きな開きがあることが読み取れる。それもそのはず、昭和三〇年／四〇年頃のものなのだ。昔屋市内の布や糸など裁縫用品を扱う小間物店で使用されていた。店の隣には、名の知れた洋裁学校があった。

今日のレジスターの普及には、スーパーマーケットの登場が影響を与えている。スーパーマーケットが誕生したのは昭和二八年（一九五三）、東京青山であった。たくさんの種類の商品がそろった広い店内で、買いたいものを自由に選び、清算は最後にレジで済ませる。専用の袋が用意され、買い物籠なしで仕事帰りにもショッピングができる。スーパーマーケットは、高度経済成長のきびしが見え始めた日本社会で時代の申し子のようにもてはやされ、わずか一〇年の間に全国で三〇〇〇店近くにまで増えた。そして、一括清算をするスーパーマーケットは、レジスターにとっての最高の働き場所でもあった。

レジスターの歴史は思いのほか古い。明治一二年（一八七九）にアメリカのオハイオ州、酒場の経営者が発明したと言わわれている。その人の名はリッティ。使用者が売上のビンはねをしていないかチェック

クするためだったとか。毎度のように悔しい思いを味わったのが発明のエネルギーだったのかと思うと、なかなか面白い。

レジスターが日本に輸入されたのは、明治三〇年（一八九七）。当初は「金銭登録器」と呼ばれていた。奇しくもこの年、東京神田でミルクホールが開業している。ミルクホールとは、温めた牛乳と焼いたパンなどを出すファーストフード店のやうなもので、簡便さとハイカラな雰囲気が受け、一時は大流行した。しかし、エプロン姿の女性が給仕していたことから、風紀上の問題が取りざたされ、すれていった。明治時代のファーストフード店「ミルクホール」が「金銭登録器」のデビュー場所だったらビックリだと思うのは、私だけだろうか。

ところで、このレジスター、今も昔も清算キイを押して現金が入っている引き出しが聞くと、なぜか必ず「チン！」と派手な音を立てる。おもちゃのレジスターまで同じような音が出る仕組みになっていて、どうやらあの音とレジスターとは切っても切れない関係らしい。しかし、なぜあんな音が必要なのかと気にかかる。

同じように「チン！」と音をたてるもので、私がまず思いつくのは電子レンジである。最近の機種は派手な電子音やメロディが鳴るが、初期のころの製品は必ず「チン！」だった。今でも電子レンジを使うことを「チンする」と言う人もいるくらいで、一時は電子レンジの代名詞になっていた。この「チン！」は、「調理がおわりましたよ！」はやく庫内から出してください！」というお知らせである。このころでは電子レンジだけでなく、洗濯機、炊飯器などにも同様のお知らせ機能がついている。すぐ動くのが面倒でお知らせ音が鳴つても知らん顔していると、時間置いて何度も繰り返す製品もあり、うるさいと思うこともたびたびだ。



レジスター▲▶



▲ 堀川 麻梨さん



▶ 阿部 紗織さん



レジスターの場合は、「現金引き出しを聞きました」というお知らせ音だろう。簡単な警報ブザーとしての役目もあるのかもしれない。なにしろ、発明者は使用人のこまかに悩んだりフティである。使用者が勝手に現金引き出しを開けてもわかるような工夫のひとつやふたつはしているはずだ。

しかし、私にはそれだけでなく、あの音は「計算できました！ 清算が終わりました！」というお知らせ音にも聞こえる。買い物の金額を次々と入力され、最後の「チン！」とともに「〇〇円です」と告げられる。すると、なんの疑いも持たず条件反射のように支払っている。それが、知らず知らずのうちに習慣として身についてしまっているような気がする。電子レンジや洗濯機も同じなのかもしれない。お知らせ音を、時にはおせつかいと感じながら、身体はつい反応している。にぎやかな「お知らせ民具」にいつのまにか慣れられている自分自身を、照れくさいながらも認めざるを得ないのだ。

平成一三年も、恒例の「トライやる・ウイーク」が実施され、史料館でも本庄中学校二年生の二人を受け入れた。堀川麻梨さんと阿部紗織さんの二人で、六月五日と八日の二日間、史料館の業務を体験してもらつた。

初日は館外へ出ての史跡調査の実習や、館内の展示資料の収納、展示作業などを体験してもらい、二日目は館蔵品の整理作業と団体見学者の対応などを体験してもらつた。

両日とも、デジカメ・パソコンを使用しての作業があったものの、今の中学生は小さい頃からコンピュータをいじっているので、二人ともこれらの機器の扱いをすぐに習得してくれた。

来館当初は、歴史にはあまり興味がないと言っていた一人であったが、一日間の体験で少しは身近な歴史に関心を寄せてくれたようである。

## トライやる・ウイークと史料館

史料館研究員 道 谷 卓

## 史料館日誌抄

史料館研究員 道 谷 卓

資料寄贈者「芳名」（敬称略・二〇〇一年四月）以降

## 平成十三年四月以降

- △平成十三年▽  
 6月5日 トライヤー・本庄中学校（三年生二名を受入れ、一日間に渡り史料館の業務を体験してもらう。）  
 6月8日 神戸商船大学（見学者二十五名）  
 6月29日 東灘区役所新規採用職員研修（見学者二十四名）  
 8月4日 宝塚造形デザイン大学（見学者五人）  
 10月12日 濑川多聞小学校（三年生（見学者二十四名）  
 11月16日 魚崎小学校（三年生（見学者一七五人）  
  
 △平成十四年▽  
 1月18日 本庄小学校（三年生（見学者一二九名）  
 1月19日 御影小学校（三年生（見学者七十四名）  
 1月24日 こうべ小学校（三年生（見学者九十二名）  
 美野丘小学校（三年生（見学者六十六名）  
 1月25日 雲中小学校（三年生（見学者七十名）  
 2月1日 六甲アーランド小学校（三年生（見学者一三五名）  
 2月2日 西灘小学校（三年生（見学者七十一名）  
 2月4日 本山第一小学校（三年生（見学者一三三名）  
 2月7日 本山第三小学校（三年生（見学者九十六名）  
 2月8日 宮本小学校（三年生（見学者二十七名）  
 住吉小学校（三年生（見学者七十二名）  
 2月14日 福池小学校（三年生（見学者六十四名）  
 2月15日 渕小学校（三年生（見学者三十四名）  
 2月16日 本山南小学校（三年生（見学者七十二名）  
 2月22日 東灘小学校（三年生（見学者一二三名）

## 編集後記

昨年度も、毎年恒例になつた小学校三年生の団体見学の受け入れを無事終了することができた。過去最高の一七校・一四四九名の子供たちが、史料館で展示資料や館員の解説を通じて、地域の歴史と昔の暮らしを学習してもらつたことになる。

今年度からは学校も完全週休二日制の実施に伴い総合学習が導入され、史料館の二一校もこれまで以上に増してくることになるであろう。史料館としてもできるだけそのような要望に応えていきたいと思う。

(T・M)

「生活文化史」 第29号 02・5・1

編集／道谷 卓  
発行／神戸深江生活文化史料館〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-7  
078-453-4980 (FAX兼用)